

ペット産業の裏側

青木麟平・猪俣ひろか

繁華街にある小汚いペットショップの中で商品として展示される子猫たち。若い女性にまるでアクセサリ感覚で飼われる小型犬たち。良くも悪くもペットが大量に消費されるようになった日本だが、そのペットたちが国内でどのように流通しているのかはあまり知られていない。日本におけるペットの流通システムを考える際に、切っても切り離せないのがペットオークションと呼ばれる生体市場の存在だが、動物愛護団体の中にはこのペットオークションに潜む危険性を指摘するものもある。その実態とは一体どのようなものなのか。

いくつかの動物愛護団体によると、日本ではペットオークションがペットの流通のシェアの50パーセント近くを占めているといわれている。ペットオークション会場では空調もままならない状態のなか、狭い段ボールの中に押し込まれた小さな犬猫たちが次から次へと運び込まれてくる。動物たちにとって、そのような狭い空間に長時間閉じ込められることは非常にストレスがかかる。その後、業者が段ボールから粗雑に犬猫を持ち上げ身体検査をしていくのだが、その様子はさながら工場の生産ラインの様である。

ペットオークションは日本におけるペットの主要な流通経路だが、そこには数多くの危険性が指摘されている。日本動物福祉協会の山口千津子さんは「ペットオークションは感染症の伝播のリスクがある」という。ペットオークションは動物取扱業者の登録をしている者ならだれでも利用できることになっている。中には悪質なブリーダーが混ざっていることもあり、そのようなブリーダーの下で繁殖されたペットは病気を抱えているケースもある。そのため一度に大量のペットが行きかいするペットオークションでは、感染症の伝播のリスクが高まるということなのだ。

またペットオークションでは大量の犬猫が次々とセリにかけられ、その後各地のペットショップに運ばれるため、一匹一匹のDNA登録番号や健康状態などを正確に把握することが難しいといわれている。「ペットオークションを経由してペットを購入すると、正しいペットの個体情報が得られない場合がある」と山口さんはいう。なかには購入した犬はオスだったにもかかわらず、飼い主のもとに届いた血統書にはオスと書かれていたというケースがあったそうだ。

このように今の日本のペットの流通システム、特にペットオークションは数多くの危険性が指摘されている。そのような問題を解決するためには、国が率先してメスを入れていくと同時に、地方自治体も悪質なブリーダーの監視や取り締まりに力を入れていかなければならない。しかし、一人一人の飼い主が現行のペットオークションの危険性をしっかりと理解し、動物の福祉を最優先するといった考えをしっかりと持つことを忘れてはならない。

編集後記

今回ペット産業の記事を書くにあたって意識したことは、とにかく取材に重点を置くということであった。そして普段の生活からは見えてこないような、実態というか実情というか裏側といったものにスポットライトを当てようと試みたのである。しかし、肝心の取材が順調にいかず、記事の内容も思うようにはいかなかった。では一番の収穫は何かというと、至って当たり前のことではあるが、取材以上のものは書けないと再認識したことである。今後はより一層取材に力を入れていこうと思う。

青木麟平